

広告

アフターコロナの 葬儀事情

福岡県葬祭業協同組合
馬場 昭典 理事長に

お話しを伺いました。



福岡県葬祭業協同組合とは…

全日本葬祭業協同組合連合会に加盟しておる全国約1300社と加盟している連盟の福岡県葬祭業協同組合で福岡の約30社の葬儀社からなる福岡屈指の葬儀社組合でお客様への葬儀社に対する安心感をお届けいたします。

——2020年を振り返って頂けますか。新型コロナウィルス禍で、葬儀をどのようなカタチで行いましたか。

馬場氏 全葬連より組合員向けに「新型コロナウィルスの対応について」という冊子が昨年1月から9回に渡つて発行されました。これに従い、「3密」をキーワードに、式場入口での検温をはじめ、手指消毒液や配布用マスクの準備、椅子の間隔空け、定期的な換気、式前式後の会場消毒などを徹底し、感染防止に努めました。併せて通常の葬儀を希望する喪家様には、ご身内ののみで通夜と葬儀を行つて頂き、一般会葬者様には時間を前後に設け、会葬者様にマスクの着用や焼香のみでお引き取り頂くなどをお願いし「密」を避けました。

——「コロナ禍において新しい生活

様式が変化するとともに、さまざまな業種での形態の変化が見られるなどしています。葬儀のカタチはどうになっていくのでしょうか。

馬場氏 近年、家族葬が増えていきます。都市部だけでなく、地方においてもそうです。特に今年はコロナ禍という状況もあり、地方でも9割に迫るほど増加しました。一方で、組合員各社違いはあります、WEBによる葬儀のリアルタイム配信、SNSを使った訃報連絡、サイトでの追悼映像配信や供花と香典の受付などさまざまなサービスを始めています。いま、葬儀の在り方は激変の過程にあります。ただ、大切な人を失くした悲しみは、いつの時代にあっても大きなものです。たとえ葬儀のスタイルが変わつても、葬儀の大切さは変わらないはずです。あくまで私見ではありますが、今後は喪家の想いをより反映した葬儀のカタチへ進んでいくと考えます。

——皆様の葬儀に日々携わる立場として、広く伝えたいことはありますか。



馬場氏 大きく分けて2つあります。1つは、なぜ葬儀があるのか、一度皆様に考えて頂きたいということです。本来葬儀には故人の弔い、残された方々の心のケア、世代交代のお披露目など、さまざまな意味合いがあります。

——最後に馬場氏の新年の抱負をお願い致します。

馬場氏 コロナ禍という、特殊で厳しい社会情勢のなか、多くの人の価値観や思考が変化していくと感じます。今後何が求められるのか、いち早く予測し、迅速に決断を下せるよう、感覚を研ぎ澄まして、業界発展のために邁進いたします。

**福岡県葬祭業
協同組合加盟葬儀社**
<順不同>

